公益財団法人 美作学術文化振興財団

作州路

Vol. 26
2023/3

―文化の薫る活力ある地域づくりをめざして―　財団では、このような事業を行っています。

普及啓発事業

1. 財団ニュース「作州路」26 号の発行

2. 普及講座の開催

「プリントでオリジナルＴシャツづくり」

講　師／河内大樹
期　日／令和５年２月 12 日（日）
会　場／勝央美術文学館

「プリントでオリジナル
Ｔシャツづくり」の様子

3. 事業協賛に伴うＰＲ活動

「金時祭花火大会」への協賛
【花火大会の規模縮小により協賛事業は無し】

芸術文化活動事業

【主催事業】
■公募展の開催
○第 19 回ミマサカコドモ絵画展
会　期／令和５年１月６日（金）
～令和５年１月 29 日（日）
会　場／勝央美術文学館
展示室・町民ギャラリー 1･2

「ミマサカコドモ絵画展」会場風景

■作品展の開催
○gallery exhibition vol.35
coloring books –河内大樹作品展–
会　期／令和５年２月 12 日（日）
～令和５年３月 12 日（日）
会　場／勝央美術文学館
町民ギャラリー１

「gallery exhibition vol.35
coloring books –河内大樹作品展–」
会場風景

■公演の開催
○岩波ホール発　白石加代子
「百物語」
と　き／令和４年 10 月 27 日（木）
会　場／勝央文化ホール

岩波ホール発　白石加代子「百物語」チラシ

【共催事業】
■企画展の開催
《文学》
○小企画 41
「―文筆の系譜― 綺堂からやえ子へ」
○特別展
「岡本綺堂生誕 150 年記念展 奇譚の神様」
《美術》
○コレクション展 vol.44
郷土の画家シリーズ「遠くみのれる」

【助成事業】
芸術文化活動助成
○勝央金時太鼓保存会活動
○勝央町文化協会活動事業
○THE FIVE MUSES SUPER JAZZ SESSION 2022

【後援事業】
○AMAZON 密林の時間 山口大志写真展
○夏井いつき句会ライブ
○SILT サンドアートパフォーマンス・ライブ
～砂で綴るものがたり～
○宝くじ まちの音楽会 岩崎宏美 with 宗次郎
～心のふるさとを求めて～
○東京演劇集団風
Touch ～孤独から愛へ～
○公共ホール音楽活性化支援事業
山本奈央＆田村緑 ふしぎの森のコンサート
～小鳥さえずる癒やしの調べ～

その他の事業

1. 文化財資料収集保存事業
2. 学術的研究及び図書の発刊事業への
助成事業を継続しておこなっております。

地域の文化活動を応援します！

地域芸術文化振興のための助成活動を実施しております。詳しい内容は、財団事務局へお尋ねください。

当財団への皆様の貴重なご寄付をお待ちしております！

当財団への皆様のご寄付は、地域文化事業の実施に役立てられています。
ご寄付をいただいた皆様は、税額控除をうけることが出来ます。

表紙について【洋画家 赤堀佐兵と出雲街道勝間田宿】

来年、生誕１２０年を迎える洋画家の赤堀佐兵は、旧出雲街道勝間田宿の呉服店「山手屋」の四男として生まれた。父 貫一の没後、1927（昭和 3）年に店は倒産。住む人も変わり、当時の面影はないが、道の曲がりに往時が偲ばれる。表紙写真は、「山手屋」のあったあたりの街道を西から東に見たところ。右の写真は、同じ場所を表紙とは逆に東から西に見たあたり。一番奥に「山手屋」の箪笥売り場があり、その向かいに「山手屋」本店があったようだ。1922 年（大正 11）年旧勝間田郵便局に電話が開通した当時の様子。現在残るのは、郵便局長をしていた赤堀家宅の門のみ。

石浦浩治編『写真で綴る勝央町百年』
（1990 年）p.64「勝間田郵便局」より

編 集 後 記

本紙が発行される 3 月は、奇しくも本文連載「出雲街道宿場考」に登場する洋画家 赤堀佐兵（あかほり・さへい 1904-1961）が、生まれて、没した月です。また、2024 年は、赤堀の生誕 120 年目にあたり、顕彰事業が進んでいます。
今回は、過去の展覧会をきっかけに知ることとなった赤堀家に縁の“歴史秘話”を、「勝央町の歴史を語る会」の木村泰二先生にお願いし、ご寄稿をいただきました。幕末の大事件と赤堀の不思議な縁を深く感じます。（E.N）

公益財団法人　美作学術文化振興財団
〒709-4316 岡山県勝田郡勝央町勝間田207-4　Tel. 0868-38-0270 ／ Fax. 0868-38-0260

発行日：2023 年 3 月 31 日
編集・発行：公益財団法人美作学術文化振興財団
印刷：（株）廣陽本社

神戸事件と洋画家 赤堀佐兵

木村泰二

1. 一冊の本

令和元年の年の瀬、友人の妹さんから一冊の本が贈られてきた。

彼女は私の妹と同級生で、我が家に遊びに来ていた頃の思い出しかなかった。しかし、前年彼女の叔父さんが 103 歳で亡くなられた。私にとりましても中学生時代の恩師であったので、葬儀に参列した。その時、何十年振りかで、彼女の新聞投稿文を読ませていただいたことなど話した。

それが契機で送ってこられた本は、山陽新聞の「ちまた」などへの投稿文を編冊したものであった。

お礼の手紙を書き送ると、返事が届いた。文面のなかに、赤堀佐兵さんのことが書かれていた。それによると、赤堀佐兵生誕 100 年記念の展示会をきっかけに、遠い過去のことがよみがえってきた。子どもの頃、近所の下山省三（下山本陣、劇作家志望、額田六福に師事、岡本綺堂の門下生。郷土にまつわるオリジナル創作、ラジオドラマ等に入選。勝央町の歌作詩。）宅に度々来られており、大人たちが「さへえさん」と呼んでいたのが、記憶に残っていた。そこで、彼女は郷土が生んだ赤堀佐兵の清貧の画家の功績・人柄を知ってもらいたい一心で、山陽新聞の「ちまた」に投稿した。すると、全く知らない瀧正敏さんという方から、「赤堀佐兵は私の叔父にあたります。」という便りが届いた。その文面によると画業ひとすじ、欲のない素朴な生涯が深い尊敬と愛情で記されており「大好きな叔父のことを記して下さってありがとう。」と書かれていたそうだ。

2. 赤堀佐兵

私はこの手紙を読んで、何とも言えない感動に襲われた。

赤堀佐兵画伯のことについては、あまり気にしたことがなく、詳細は知らなかったので、調べてみた。

勝央町制施行 50 周年記念事業の一環として「生誕 100 年記念 赤堀佐兵展―静寂の美学―」が、2005 年（平成 17 年1月 6 日－3 月 6 日）勝央美術文学館で、開催された冊子が出てきた。

それによると、彼は 1904 年（明治 37 年）勝間田の呉服店、山手屋に生まれた。1924 年（大正 13 年）、現在の関西大学第一高等学校を卒業と同時に帰郷、山手屋を継がれた。その頃、姉の「つる」さんが、岡山市在住の瀧正信氏に嫁がれている。

父 赤堀貫一の没後、店が破産したため、1928 年（昭和 3 年）、画家を志して上京した。親族の額田六福宅に下宿、1930 年協会洋画研究所に学ぶこととなった。協会第 4 回展に「阿佐ヶ谷の秋」を出展、初入選を果たした。

当時郷里出身で、三井銀行頭取を務めておられた万代順四郎氏の知遇を得られるようになった。

1931 年（昭和 6 年）独立美術協会創立と同時に入会。以後、会員の小島善太郎氏に師事、協会第 1 回展に「石切場」が入選。以来、10 回展まで連続入選を果たす。

小島善太郎氏の評によると、「貧しさを意に介せず、ただ黙々と描き続け精進に次ぐ精進の生涯。地味ではあるが作品の美しさは、その誠実な人柄が生みだした真実の美の世界である。」とあった。

1944 年（昭和 19 年）、戦争の激化のため、勝間田、額田治郎（元町長）宅に疎開。戦後の1949年（昭和24年）上京、制作に励むも、1961 年（昭和 36 年）胃がんのため逝去、56 歳であった。

1994 年（平成 6 年）勝央町は、名誉町民に追頌した。

以上、赤堀佐兵氏の経歴の一端が理解できた。

その後、彼女に瀧正敏氏から「神戸事件の瀧善三郎正信は、私の曽祖父です。」との便りが届いた。現在、神戸事件と曽祖父のことを広く後世に伝えるべく、講演活動中であるとも記されていた。

2018 年（平成 30 年）が明治元年から 150 年目に当る年であり、神戸事件が勃発したのが 1868 年（慶応 4 年）、この年の 9 月 8 日が明治元年である。

この事件が日本外交の大きな転換点となったにもかかわらず、長く日本歴史から埋没された事実は何だったのか、広く世間に知っていただきたい一心であると書かれていた。

赤堀佐兵と神戸事件との縁を感じ、事件について瀧氏に代わりここに記してみたい。

3. 幕末の時代背景

時代背景についてみると、1858 年（安政 5 年）安政の大獄が始まり、1860 年（万延元年）には桜田門外の変が起こる。以来、長州藩を筆頭とする尊王攘夷派と公武合体で、国難を乗り切ろうとする幕府側との血を血で洗う暗闘が繰り拡げられるようになった。

1862 年（文久 2 年）の生麦事件による薩英戦争、1864 年（元治元年）の四国艦隊下関砲撃事件などにより、尊皇攘夷運動は大きく後退したのと、公武合体の限界も重なった。これにより、坂本竜馬などの尽力で、1866 年（慶応 2 年）に薩長両藩の同盟が成立し、時勢は倒幕へと大きく動きだした。

翌年には将軍徳川慶喜が大政奉還を決定し、朝廷に奏上の上、大坂城に退去した。ここに王政復古し、明治新政府が誕生した。しかし、1868 年（慶応4年）徳川慶喜をおしたてる旧幕府軍と新政府軍が衝突、戊辰戦争（1 月 3 日）が始まった。

4. 神戸事件

「神戸事件」とはどんなことであったか。

学生時代に日本史の中で習った記憶もなく、いろいろな歴史書で調べてみても、簡単な記述のみで理解に苦しんでいた。

運よく例の彼女から、瀧正敏氏からいただいた資料を送るとの連絡があった。送られた資料をもとに調査した結果、以下のようなことが解った。

1868 年の 1 月 11 日に神戸事件は起こった。原因は徳川方の尼崎藩を牽制するため、明治政府は備前藩に摂津西宮の警備を命じた。

日置帯刀（へき たてわき）は備前金川一万六千石領主で、備前岡山藩の家老であった。彼は兵約 340 人余を率いて 1868 年（慶応 4 年）1 月 4 日に出発、11 日に神戸に入った。

隊列が神戸三宮神社近くにさしかかった時、フランス兵二人が隊列を横断しようとした。備前藩の砲兵隊長として主命を受け、仕官としてその場に居た瀧善三郎正信が、槍を持って制止に入った。これを見た水兵数人が拳銃を取り出してきたので、滝が「鉄砲、鉄砲」と叫んだのを発砲命令と受け取った藩兵が発砲した。

現場に居合わせたイギリス公使ハリー・パークスは激怒し、緊急事態を通達、銃撃戦に発展した。

日置帯刀は即藩兵隊に射撃を中止、撤退命令を出し、何とか負傷者もなくその場は収まった。しかし、神戸に領事館を持つ列強諸国は居留地防衛名目で、神戸中心部を占拠し、兵庫港に停泊していた日本船を拿捕した。

三宮神社（兵庫県神戸市）

5. 事件の結末

新政府はただちに列強諸国の公使に平謝りする。しかし、この時点で朝廷は諸外国に対して、徳川幕府から明治政府への政権移譲を宣言していなかったため、伊藤俊輔（博文）を解放折衝にあたらせたが、決裂した。

1 月 15 日になって急遽、開国和親を朝廷から宣言した上で、明治政府の政権移譲を表明し、東久世通禧（ひがしくぜ みちとみ）公を代表として、解決にむけての交渉を開始した。

しかし、6 カ国公使連名で、次の 3 点を約束させられた。①天皇書面で謝罪　②再発防止の保証　③責任者の処罰

この中の3点目、責任者の処罰については、仕官、つまり大砲隊の隊長であった瀧善三郎正信の死罪を要求した。指揮者の日置帯刀には謹慎を命じた。明治政府は仕方なくこれを飲み、公使団の怒りをといてもらった。

しかし、備前藩としては、武家諸法度で禁じられている「供割」を無視して、善三郎の制止も聞かず拳銃を持ちだしたこと、戦闘で死者が出ていないことで、非なしと拒絶した。そこで、新政府は岩倉具視公を派遣して備前藩を強引に説得、その責任を認めさせた。

1868 年（慶応 4 年）2 月 2 日新政府より、備前藩へ処刑決定通知が出された。同時に日置帯刀には謹慎命令が下った。善三郎は第一に旦那様（家老　日置帯刀）第二に殿様（池田茂政）に迷惑がかかることを心配していたので、快く受諾した。

同年 2 月 9 日善三郎は各国関係者立ち合いの中、神戸永福寺で切腹、32 歳であった。

この切腹場面については、新渡戸稲造著『武士道』の中に ―「切腹」について、描写してみようと思った。しかし、維新期の英国駐日公使館書記官であるミットフォードが、自分が検分した瀧善三郎正信の切腹場面を活写しているので、それを引用した― とある。

なかでも善三郎の切腹直前の口上は、自分の非として臆することなく、堂々としたものであった。

「拙者はただ一人、無分別にも誤って神戸において外国人に対し、発砲の命を下し、その逃れんとするを見て、再度撃ちかけしめ候。拙者今その罪を負いて切腹致す。各々方には検視のお役目ご苦労に存じおり候。」と一礼し、麻の袴を帯のあたりまで、脱ぎさげたとある。

善三郎の切腹により、パークス英公使は明治政府のこの態度をもって、外国との和親にいかに誠意があるかを示す証拠として利用し、各国公使に説いてまわった。それにより神戸は解放され、列強による植民地から免れたこと、明治政府が正式に海外から認められたのである。

6. 歴史的意義

この事件については、詳細が明るみに出れば明治政府の土下座外交が公になるので、箝口令が敷かれた。特に地元備前藩と金川藩には、厳重な箝口令が敷かれた。この事件が歴史上の重大な事件にもかかわらず、歴史から抹殺され、一般に知られていないのは、これが理由であった。

歴史的に見れば、明治政府の基本姿勢の転換、つまり、倒幕の大義名分であった尊王攘夷の方針をやめ、開国和親に転換したことの端緒となったのが、神戸事件である。

事件決着後、備前岡山藩は善三郎の無念の切腹に報いるため、長男成太郎は支藩の金川藩から備前岡山藩に五百石の異例の増石。長女いわは善三郎の跡継ぎとして金川旧置家に仕え、養子 正明を迎え百石を賜った。

1853 年（嘉永 6 年）ペリーの来航から、1868 年（慶応 4 年・明治元年）の明治政府成立までの 10 数年は、日本が近代的統一国家として誕生する陣痛期であった。そして世界史との深い関連のもとに行われた。

多くの人々が日本の前途のためにその命をかけた。

そのような人々の姿、そしてまた、歴史全体の動きが、今日私たちの生活に多くの示唆を与えるものとなっている。

7. 各種資料

○記念碑
- 神戸、三宮神社の神戸事件発生の碑
- 神戸、能福寺顕彰碑
- 岡山御津金川、七曲神社義烈碑
- 岡山御津金川、生誕の地の碑

○墓地
- 岡山、東山墓地
- 岡山御津金川藩主、日置家の京都妙心寺春浦院は墓地

○書籍
- 磯田道史著『日本史の内幕』（中公新書 2455・2017 年）
- 甲斐蘭蕃著『天邊の月、小説、瀧善三郎正信と神戸事件』
- 新渡戸稲造著『武士道』
- 岡山県広報協会編『おかやま人物風土記』
- 県史シリーズ 33『岡山県の歴史』
- 赤井克己著『おかやま雑学ノート』
- 板津謙六著『金川町史』『七曲神社と金川』
- 岡山ペンクラブ編『岡山人じゃが』
- 第 25 回国民文化祭岡山県実行委員会編『あっ晴れ岡山人』